

常松大谷遺跡 つねまつおおたにいせき & 常松菅田遺跡 つねまつすがたいせき

何のおまじない？

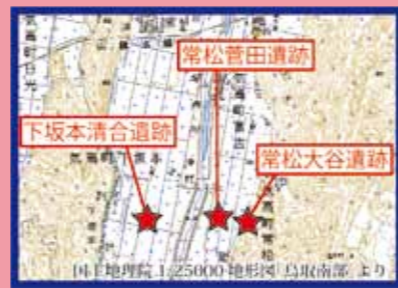
常松菅田遺跡では、広報第62号のトップページでお伝えした木製の馬形に続き、まじないで使われたと考えられる遺物が出土しています(^o^)



写真1は土製の素焼きの土馬で、空を見上げるような状態で出土したようです。背中に「鞍」をつけています。

土馬は、雨乞いなどのまじないに使用した、または厄病神の乗り物であったという説があります。今回出土した土馬は、厄病神の乗り物の動きを封じるためか、右前足と左後足が折られています。

そのほかに、以前に木製の馬形が見つかった流路から、「斎串」という木製品がまとまって200点以上出土しました(写真2)。斎串は、地面に突き刺してまじないのときの結界として利用したり、神様の代わりとしてまつたと考えられています。今回、斎串がたくさん出土しているのは、同じ場所で何回もまじないを行ったからかもしれません。



下坂本清合遺跡 しもさかもとせいごういせき

下坂本の歴史に「一石」！？

3-1 区の西端で、鎌倉時代以前のもと考えられる建物の柱の穴が並んで見つかりました(写真1)。その穴を掘り下げてみると、底に板石が敷かれたものがあります(写真2)。

これは礎板石と呼ばれる、重い建物の柱が沈むのを防ぐために敷かれたものです。

この建物は、一辺8m以上で、当時の倉庫やお寺などに多くみられる総柱建物(柱を碁盤目状に配置した建物)である点などの特徴をみるにつけ、この建物のただならぬ感じが強く伝わっており、担当者の想像(妄想?)は膨らむばかりです。



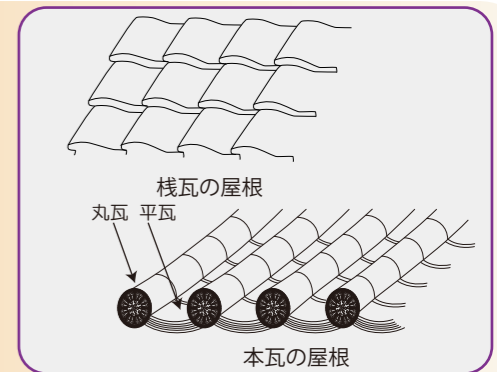
第65号 2014年9月22日

遺跡から出土する遺物のなかに瓦があります。現代ではどこの家屋でも見られる瓦ですが、昔と今ではその形や使われる場所に違いがあったようです。今回はそんな瓦についての紹介をしたいと思います。



今と昔の『瓦』のはなし

現代の家屋に葺かれている瓦は断面が波形をした「棧瓦」と呼ばれるものです。しかし、飛鳥時代(約1,400年前)に朝鮮半島から日本に伝わったばかりの瓦は「本瓦」と呼ばれ、棧瓦とは異なる形状をしていました。丸瓦と平瓦という2種類の瓦を交互に重ね合わせて葺いており、とくに軒先に用いられる瓦には文様が描かれるなど装飾性豊かなものであったことが知られています。



文字瓦…なんと書いてあるように見えますか？

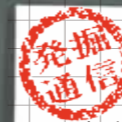
現在調査している大桒遺跡から少し珍しい瓦が見つかりました。瓦の表面に文字がスタンプされた「文字瓦」というものです(左写真)。文字瓦とは、丸瓦や平瓦に地名や人名のほか、建物の名前などが記されたもので、地域の歴史を明らかにするための貴重な資料となります。出土した瓦は小さな破片で、なんという文字かわかりませんが、今後の調査で文字が判明すれば遺跡周辺の当時の地名や建物の名前がわかるかもしれません。

私たちにとって瓦が葺かれた建物はごくありふれたものですが、昔はお寺や役所など特別な建物でのみ瓦が使われていました。瓦葺き屋根は昔の人々の目にはさぞ物珍しく映っていたことでしょう。

(公財) 鳥取県教育文化財団
調査室

〒680-1133
鳥取市源太 12 番地

TEL : 0857-51-7553
FAX : 0857-51-7550
メールアドレス :
tottori-kyobun@kyobun.
sakuratan.com



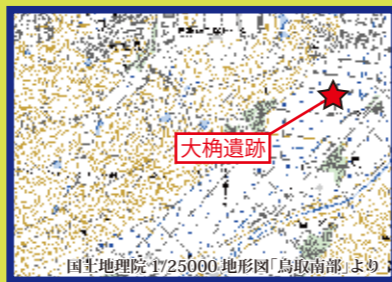
9月も下旬をむかえ、朝晩には秋の気配を感じるようになってきました。暑さも和らぎ、普段の生活も過ごしやすくなりましたね。各現場ともさらに新たな発見をお届けできるよう、毎日調査中です。調査成果はHPや今後行われる予定の現地説明会でもお知らせしていきます。来月の『発掘通信』にもご期待ください(^o^*)

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

大楠遺跡

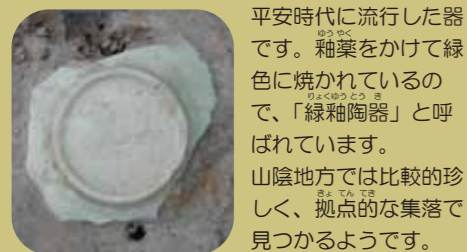
だいかくいせき



古代の有力者住まう！？

発掘調査も中盤戦。現在 1-1 区では、平安時代中頃（約 1,000 年前）の地層を調査し始めています。この調査区では、今までにホームページでもお知らせしているように、平安時代の優れものがいろいろと見つかっています。ここではその一部をご紹介します♪

その一 都の流行りモノ



平安時代に流行した器です。釉薬をかけて緑色に焼かれているので、「緑釉陶器」と呼ばれています。山陰地方では比較的珍しく、拠点的な集落で見つかるようです。

その二 古代人の落し物



承和昌

その三 可愛い顔のアイツ



先月号でもお知らせした「人形」。自分の分身として「ケガレ」を移して川に流すおまじないの道具とされています。それにしても、なんだか素朴でかわいい顔ですね (^_^)

主に奈良時代から平安時代にかけて日本が独自に作った銭貨（お金）の一つで、「承和昌寶」といいます。この銭貨は 835 年以後に作られたことがわかっています。

どの遺物も一般のムラで見つかるものとはちょっと違うので、どうも平安時代の有力者が住んでいた場所のようです。いやが上にも期待で胸が膨らみますが、果たしてその予想やいかに！？ (^_^)

松原田中遺跡

まつばらたなかいせき



県内2例目となる貴重な発見！大壁建物か？



396溝全景（北西から）

2区からまたまた新たな発見です！今回は、396溝と呼称する南北 11.2m、東西 8mの長方形に溝を掘り込み、およそ 1.1～2m 間隔で溝底に柱を立てた遺構が見つかりました。柱の総数は 20 本以上で、いずれも 10×20 cm くらいの角材に加工しています。溝から出土した須恵器から古墳時代後期のものと考えられます。

これは渡来人とのかかわりが深いとされる、土壁で柱を塗り込めた「大壁建物」と呼ばれる遺構に類似しています。しかし今回の調査では、土壁の痕跡はもとより、渡来人とのかかわりを示す遺物も見つかっていません。また、本当に建物とみてよいのか、といった課題があります。

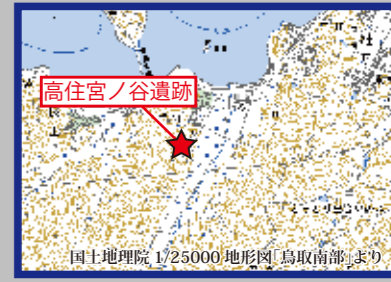
とはいえ県内では、倉吉市の夏谷遺跡に次ぐ貴重な発見例であり、今後こうした遺構の性格について考えていく必要があります。



柱根が見つかった様子（北西から）

高住宮ノ谷遺跡

たかすみみやのたにいせき



中世びとの祈り 県内初！「こけら経」が出土しました！

直径 3m ほどの穴を掘り下げている最中、作業員さんがスコップで掘り上げた土の下から、なにやら文字の書かれた細長い木片が！！

慎重に周囲を掘り下げたところ、幅 1.8cm で裏が透けるほどの薄い木片に 12 個の文字が墨で書かれていました。取り上げて調べた結果、仏教の経典「法華経」の「譬喩品」の一部であることがわかりました。

こうした薄く細長い木片にお経を書いたものは「こけら経」と呼ばれており、中世後半（15～16 世紀頃）に多く作られました。死者への供養などとして書写されたもので、寺院に奉納したり、儀式の後に水に流したりしたようです。全国の出土例と寺院などからの発見例を含めると 110 例以上が見つっていますが、**鳥取県内では初めての出土**です。中世の信仰を知る貴重な資料となりました。



「坐師子座而自慶言我今快樂」の 12 字が読み取れます。

高住牛輪谷遺跡

たかすみうしわだにいせき



古墳時代のニュータウン！？



造成でできた平場に柱穴がたくさん。

高住牛輪谷遺跡では、古墳時代の終わり（約 1,400 年前）に造成工事が行われていたことがわかりました。造成によって、山裾の一部を削り、谷を埋め、地面を平坦にしたようです。

この造成でできた平場からは穴がたくさん見つかりました。なかには木の柱が残っている穴も見つかったので、これらは建物の柱穴と考えられます。ただ、柱穴が見つかった平場は、まだ調査していない部分にも広がっているので、どんな建物が何棟くらいあったのかは、今のところわかりません。

こんな小さな谷間に建物を建てるため、大規模な造成工事までした当時の人々の執念（？）がひしひしと伝わってきます。



柱の根元が残る柱穴



黄色い土が造成土。山裾を削った土を持ってきたようです。